[Depend on NP] の概念研究
―認知言語学的アプローチ―

森　山　智　浩

1．研究意義

近年、「イメージ」という名の用語でもって語彙概念に触れようとしている英語学習参考書をよく目にする。特に、学習対象言語が学習者の母語体系と異なる場合、統語構造はもちろんのこと、意味生成のメカニズムにも学習者の関心が集まるのは必然のことであり、単一語の多義性や類義語間の相違、連語表現の意味のからくりなどを明らかにして語彙学習に還元しようと試みる新しい取り組み自体は高く評価されるべきものであろう。

他方、こうした取り組みの「中身」に対しては議論の余地が残されているようにも感じざるを得ない。確かに、学習参考書などの内容は厳密さを求める学術研究ではないとする見方も可能であろう。また、複雑な説明より簡易な見方の方が特に初修学習者に都合が良いというケースもあるかもしれない。しかしながら、だからといって、特に誤解を与えるような不確かなものを制限なく提供してもよいという論理は成り立たない。それによって、語用能力育成などの今後の学習内容の発展・活用に影響を与えるばかりか、不明瞭な理解（もしくは核心に至らない理解）のまま学習を進めることで対象言語の意味論的特性を把握できず、母語との異同を参照するような言語学習の醍醐味をも失いかねないからである。

誤解のないように述べると、ここでは、「イメージ」そのものの是非を問うているわけではない。そうではなく、そのようなイメージなるものが如何なる論拠でもって導き出されたかという「抽出プロセス」の在り方を議論しているだけである。こうした教育学的観点は以下（1）の捉え方とも並行し、学問としての言語研究がさらなる実学としての重要な位置づけをなされるには、その研究成果でもって教育における或る種の照合フィルターの役割も果たすべきではないかと考えられる[1]。

（1）　FD の必要性は、教員の研究重視を批判しながら教育への重点移行として主張されてきたため、教育 VS 研究という二項対立構造が生まれてしまった。しかし、大学における教育能力は、教授技術だけではなく、専門分野の研究全体の体系的な理解、分野を越えた知識・教養、最先端の研究を進める能力全般によって構成されるものである。大学教育の核心は、研究を通じて創造された知識を学生に伝えることで批判的思考能力を育て、社会の担い手へ成長させることにある。国際的な高等教育の概念規定や（ユネスコ「21 世紀に向けての高等教育世界宣言―展望と行動」）、2004 年にスタートした認証評価におけるすべての基準は、研究を教育の質を保証する項目として位置づけている。たとえば、東北大学の「研究第一主義」は、「最先端の研究に従事しながら、その成果を教育に反映させる」ためのものに他ならない。「教育志向か研究志向か」を教育改善の意欲の指標とするような枠組みは、研究の成果をカリキュラムに実体化し、優れた学術を次代に継承する大学の使命を損ない、非大学高等教育機関と大学を同じものにしてしまう。

－ 東北大学高等教育開発推進センター（編）（2008: 8-9）（下線筆者）

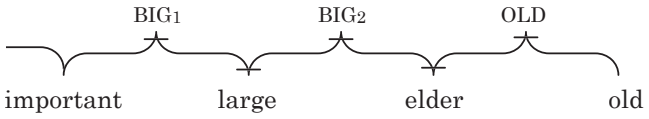
上記（1）は高等教育に関する理念であるものの、より良い教育環境整備を行い、ひいては国家のさらなる発展を支える人材育成につながるのであれば、（少なくとも外国語教育分野においては）その研究成果は中等教育機関にも積極的に還元されるべきであると考えられる。この理念に基づくと、言語研究においても「研究と教育の両輪」を如何に回すかが問われよう。

それでは、語彙概念をその論題の一つとする場合、本稿ではまず「イメージとは何か」についてが議論の対象となるが、筆者の知る限り、その厳密な定義づけを行っている学習参考書は存在していない。想像の域は出ないものの、恐らく、それを誘発した背景には 1980 年代から本格的に研究が進められるようになった「認知言語学（cognitive linguistics）」の存在が関与しているのではないかと考えられる [2]。

認知言語学それ自体の本来的な研究目的は上述した教育学的観点を目指したものではない。しかしながら、一方で、語彙研究そのものに関する言語学の歴史を紐解

くと、遥かに長い年月をかけて数多くの研究者がその人生を賭してきた歩みでもある。Jespersen、Curme、Poutsma、Kruisinga 等の伝統文法（traditional grammar）、Hjelmslev の言理学（glossematics）、Cook の文法素論（tagmemics）、ロンドン学派 Halliday の体系文法（systemic grammar）、多くの研究者が長年従事した構造言語学（structural linguistics）、Gruber の語彙研究や Chomsky の統語論中心の変形生成文法（transformational generative grammar）等がその主たるものだが、それらはすべて（理論の精密さの程度差は別として）「文」を対象とした文法理論の枠組みの中で語の意味分析が取り扱われている。他方、言理学（glossematics）と構造言語学（structural linguistics）の改良延長的な文法理論である Lamb（1966）の成層文法（stratificational grammar）では、「多義語どうしの関係」を図で示す「意味のネット・ワーク」の萌芽が見られ、「語彙の概念」という観点から興味深い点がある。その一例を簡略化して次の（２）に示す。

（２）



参考例　She is my *big sister*.（姉）　He is a *big man* of our city.（重要人物）
His house is *big*.（大きな）

この意味的ネット・ワークのアイディアは一見優れているようだが、一単語の多義性を示すだけでも図が複雑になり、この点で変形生成文法の意味素性（semantic feature）表示のような簡潔性がなく、結局は部分的に簡潔であるだけの説明に終わった。

上記で概観した理論の流れの中で、研究者が初めて行き着いた学問が、「語彙の概念的体系」ならびに「単語どうしの意味の簡潔な関連性」の説明力を持つ認知言語学である。如何なる発話・文章であっても、それが言葉で紡がれている限り、そこには話し手／書き手である母語話者の自然な経験の相が反映されている。「自然な経験の相」とは、人間の無意識的意識（UNCONSCIOUS CONSCIOUSNESS）に潜む「概念体系（CONCEPTUAL SYSTEM）」や「背景知識の枠組み（FRAME）」と

言い換えてもよい。そして、これら認知のメカニズムは、知覚器官や運動機能など生身の肉体を通して、さらには、文化・社会環境との相互作用を通して獲得される「経験のゲシュタルト（EXPERIENTIAL GESTALT）」に基づいている。下記（３）がその詳細である。

（３）Each such domain［=a basic domain of experience］is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are *experientially basic* because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent coherent organizations of our experiences in terms of natural dimensions（parts, stages, causes, etc.）. Domains of experience that are organized as gestalts in terms of such natural dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are *natural* in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies（perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.）

Our interactions with our physical environment（moving, manipulating objects, eating, etc.）

Our interactions with other people within our culture（in terms of social, political, economic, and religious institutions）

In other words, these "natural" kinds of experience *are products of human nature*. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

― Lakoff and Johnson（1980: 117-118）（下線・［　］内表記筆者）

したがって、認知言語学（特に認知意味論）の枠組みでは、異言語間における形態の異同ばかりでなく、同一表現が異なる文脈や分野で使われていようとも、その相違自体は語句の意味概念を見つめる上での障害とならない。さらに、自然言語の基

底にはそれを用いる人々の思想・行動様式が据えられていることから、認知言語学の枠組みにおける学術研究は言語文化学的色彩をも帯びることになる。ここに、認知言語学の諸理論を導入する意義と有用性が確認されよう[3]。

そこで、本稿では、日本国の中等教育における英語教育課程で必ず学習する［depend on NP］の形態と意味の関係を一例に挙げて既存の捉え方に対する反証可能性を問う一方、現象学・情報学を基盤にした認知言語学的観点からその概念的側面を見つめることにより、前述した照合フィルターとしての在り方を模索する。

2．先行研究の考察

一般に、「イメージ」という名の用語を用いた英語語彙学習参考書では、以下（1）のような内容で［depend on NP］に触れている場合が少なくない[4]。

（1）頼る、〜による

原 ぶら（pend）下がる（de）

イメージ （他人の力に）ぶら下がる、おんぶする

解 pend に＜重さをかける、ぶら下がる＞意味合いがある：pendant ペンダント（⇦首からぶら下がっている）/ pending 未決定の（⇦宙ぶらりんの）/ pendulum 振り子 / appendix 盲腸（⇦ぶら下がるようについている）

− *DEWI*（s.v. depend）（下線筆者）

このような定義づけでもって［depend on NP］の概念を語ろうとする起点には、恐らく、次の（2）に見られるような通時的視点が関与していると推測される[5]。

（2）◆ ME *depende*(*n*) ▫ (O)F *dépendre* ＜ VL **dēpendere* = L *dēpēndēre* to hang from or upon ←*dē*- ‘DE-[1]’ + *pēndēre* to hang（⇨ PENDENT）.

− *KDEE*（s.v. depend）（下線筆者）

つまり、*pend*ant や *pend*ulum などと同様、-pend という基幹を持つことに由来す

る考え方なのであろうが、その原義概念から対象義に至るまでの意味変化を導くプロセスに関して、筆者には聊か早急な考察に思えてならない。上記（２）の歴史的事実が示すように、確かに depend の原義概念が［＋HANG］に関ることは疑いようがない。事実、［＋HANG］の概念を別の形態で表した下記（３）の斜体部分が［depend on NP］と同様の概念表示で用いられていることもその証左の一つとなる。

（３）Dan: Hey, listen, Dr. Cox, no offense, I'm a big fan of the tough guy act, but let me tell you what I really think. I think you LOVE the fact that these kids idolize you. Johnny does! Johnny was always the one in the family we KNEW was going someplace. Sweet kid. Smart kid. Becoming a doctor? This is ALL he ever wanted, and yet, somehow, you've found a way to beat that out of him, haven't you? Turn him into some kind of cynical guy who seems to despise what he does. Dr. Cox, Johnny is never gonna look up to me. Ever. But he *hangs on your every word*. So I'm askin'— I'm tellin' you: take that responsibility seriously, stop being such a hard-ass. Otherwise, you're gonna have to answer to me.

– TV ドラマ *Scrubs*（2001），Episode: My Brother, Where Art Thou?（2003）（イタリック体筆者）

しかしながら、前述（１）のように「-pend をその基幹とした『ぶら下がる』概念表示語は［＋DEPEND］概念表示に移り変わる」とする論理が成立するのであれば、たとえば suspend（＜ sus-（［＋UNDER/BELOW］）・-pend（［＋HANG］）（cf. *OED*（s.v. suspend））） なども［＋DEPEND］概念表示に移り変わらなければならないが、以下（４a-b）ではそうした再現性が確認されない。このことは、自動詞 suspend が「接触」概念表示語 on との共起関係で用いられた場合についても同様である。

（4）a. 1 to hang something from something else

2 to officially stop something for a time; to prevent something from being active, used, etc. for a time

3 to officially delay something; to arrange for something to happen later than planned

4 to officially prevent somebody from doing their job, going to school, etc. for a time

5 to float in liquid or air without moving

– *OALD*（s.v. suspend, *v.*）

b. 1 to officially stop something from continuing, especially for a short time

2 to make someone leave their school or job

3 to attach something to a high place so that it hangs down

4 to decide not to make a firm decision or judgment about something until you know more about it

5 to try to believe that something is true, for example when you are watching a film or play

6 if something is suspended in a liquid or in air, it floats in it without moving

– *LDCE*（s.v. suspend, *v.*）

ましてや、上述（3）のように一見［depend on NP］と交換可能に感じられる［hang on NP］でさえも、文脈によってはそのすべてが等価となるわけではない。次の（5a-b）がその一例である。

（5）a. You can ***depend on*** him because he is a trusty person.

b. ??You can ***hang on*** him because he is a trusty person.

たとえ「初修学習者にはこのような subtle pair の概念的差異に注目する必要はな

い」という主張がなされる場合があったとしても、前述（1）のような観点から「単に『ぶら下がる（HANG)』イメージが［＋DEPEND］の概念に直結する」とする説明が日本語を母語とする英語学習者に素直に受け入れられるものなのかどうかという点にさえも疑問が残る。下記（6 a-b）に示されるように、そもそも、日本語には「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる」概念表示語句が、いわゆる「頼る」の意に自然な形で直結しないからである[6]。

（6）a. 彼は生活費をいつも母親に ?? ぶら下がっている／ ?? 吊り下がっている／ ?? 掛かっている。

b. George: Hey, at least I was a camp waiter.

Jerry: Camp.

George: It was a fat camp. Those kids *depended on* me.

（減量キャンプだったんだよ。子どもたちは僕に ?? ぶら下がっていたんだ／ ?? 吊り下がっていたんだ／ ?? 掛かっていたんだ）

－ TV ドラマ *Seinfeld*（1989），Episode 3: The Busboy（1991）

（イタリック体・日本語訳筆者）

一方、以下（7 a-b）に示されるように、「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる」概念表示語句が、いわゆる「次第である」の意に自然な形で直結する場合も観察され、［depend on NP］における多義性のメカニズムが如何なるものかについて、学習者の観点からはますます混迷を深める可能性がある。

（7）a. この成果は、君の努力に掛かっている。

b. Remy: Well, it all *depends on* how you look at it.

（すべてはそれに対する君の見方に掛かっているんだ）

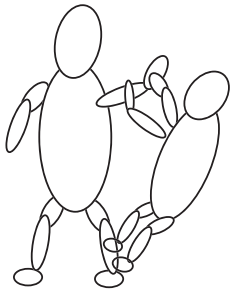
－ 映画 *Gone Baby Gone*（2007）<00:23:59>

（イタリック体・日本語訳筆者）[7]

特に前者（6）で見られた意に関して、たとえば「その老人には頼る身寄りがいな

い（The old person doesn't have any relatives to *depend on*.）」と表現される際、次の（8）図に描かれるような「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる＝頼る」と直結する概念等式は、少なくとも、日本語を母語とする英語学習者の直観には素直に一致しないように感じられる[8]。

（8）



そして、前述（1）のような記述には、現代英語［depend on NP］における on との概念関係に触れられていない場合も散見される。単に「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる（HANG）」イメージが［+ DEPEND］の概念に直結するのであれば、［hang from NP］も同様の意を表示しなければならないが、事実はそうではない。

そうした状況下、筆者の知る限り、［depend on NP］の概念そのものを詳細に見つめた学術研究は極めて少ないが、部分的にでもこの概念的共起関係に触れた先行研究の一つとして下記（9）が挙げられる。

（9）If the LM supports the TR, the latter is dependent on the former. Thus, it is quite natural that <u>ON has developed a sense compatible with dependence</u>.

（48）a. <u>to depend *on*</u> …

b. to be based *on* …

c. to count *on* …

－ Okuno（2014: 77-78）（下線筆者）

中核概念からの意味変化プロセスに光を当てることで、英語前置詞 on に関する多義性のメカニズムを明らかにしようとした Okuno（2014）の論考は十分な説得力があり、筆者も大いに参考にした。その中でも、上記（10）は on のコア・ミーニングから「SUPPORT → DEPENDENCE」への概念変遷に焦点が当てられており、その起点については、Lakoff and Johnson（1999）で論じられた on の複合概念構造における図地分化の知見とも矛盾しない。

（10）English *on* in its central sense is a composite of *above, in contact with, and supported by*. Each of these is an elementary spatial relation.

－ Lakoff and Johnson（1999: 31）

しかしながら、（Okuno（2014）は［depend on NP］それ自体の概念研究が主たる目的ではないことから当然ではあるものの）それだけでは、前述（３）－（８）で観察した諸問題は解決しない。また、（10）において同範疇内に収められている“to be based on”の on はいわゆる［+ FOUNDATION］概念による「土台」認識に基づいており、これをそのまま［depend on NP］に適用するならば、depend の基幹が持つ「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる（HANG）」イメージとの空間相関性が整合し得ない[9]。さらに、以下（11）に示される通時的観点をここに加味すれば、本来、of や from などの奪格概念表示前置詞を後続させていた depend が、なぜその共起関係のパートナーを on に切り替えたのかという論考への十分条件をも満たすに至り難い。

（11）*fig.* To hang *upon* or *from*, as a result or consequence is contingently attached to its condition or cause; to be contingent on or conditioned by. Const. *on, upon*（formerly, *of* rarely *from, to, in*）.

－ *OED*（s.v. depend, *intra.* 2）（下線筆者）

言葉を変えれば、on を後続させるようになったのは後世になってからであり、元来、奪格概念表示前置詞を従えていた depend が如何なる理由でもってその共起

パートナーを変えざるを得なかったのかという意味変化プロセスにおける「ミッシング・リンク」に光を当てない限り、depend と on との真の概念的共起関係が観察し難いばかりでなく、depend それ自体の概念体系も明らかにならないと考えられる。

この点に関して、[depend on NP] の概念そのものに関する学術研究が乏しい中、異言語比較・対照と歴史的事実の考察を見事に織り交ぜた論考として尾崎（2009）が挙げられる。本件の学術研究に直接的に関る部分を次の（12）として抜粋する。

（12）動詞 *to depend*「依存する」は古フランス語（*dependre*）からの借用語であり、元来は *pendre*「掛ける、つるす」という動詞に接頭辞 *de-* を付したものである（本来語で言えば、*to hang* に相当する）。*OED*（1989）に従えば、初出例は1413年で、ジョン・リドゲート（John Lydgate; c.1370-c.1450）からの引用である：

（13）depend 2（*OED* 1989）

1413 Lydg. Pilgr. Sowle v. wix.（1483）108 The werk that he werketh *dependeth of* fortune and not *of* him.…

ここで注目したいのは、この動詞が従えている前置詞である。初出例の中英語では現代と異なって、フランス語 *de* に当たる *of* が使われている。ところが、of という前置詞は古英語の時代でも「分離」を表していたはずである。それが何故（*up*）*on* と交代したのだろうか。他方、*depend of* に遅れること一世紀、1509年に初めて *depend*（*up*）*on* が現れる：

（14）depend 40（*OED* 1989）

1509 Hawes Past. Pleas. xvi xiv, The vii. Scyences. Eche *upon* other do full well *depende*.…

前置詞 *of* の優勢で始まる関係も、しばらく拮抗が続くが、17世紀中頃には完全に逆転して *on* が優勢になり、*of* は一気に衰退の一途を辿ってゆく。…そもそも、ラテン語では「依存する」という場合、*dependere*（*ab*）はそれほど使われず、*pendere* がその役を担っていた。後者は、*in, ex, ab, de* と

いう前置詞を、また時として名詞の奪格形を従えた。他方、*pendere* に相当する英語の本来語は *to hang* であり、前置詞 *on* と共起すると「依存する」という意味を持つようになる。*OED*（1989）によれば、この用法はとても古く、古英語時代にさかのぼる；

（19）hang 13（*OED* 1989）

a. To rest on, upon（† of, etc.）for support or authority; to depend upon; to be dependent on.

c. 1000 Aelfric Hom. II. 314 Hi ealle［gesette］*hangiath on* thisum twam wordum.…

…以上のように、古英語ウエスト・サクソン訳以外は、どの翻訳でも、希 *kremasthaien* というコロケーションを同じく「掛ける」という動詞で訳し、前置詞はすべて「接触」を表すものを用いている（古くは前置詞 *in* が、しばしば *on* の意味でも使われていた）。ところが、フランス語だけが「分離」を表す前置詞を採用している。…

…英語話者が to *depend of* の前置詞に違和感を覚えた要因について検証する。「依存する」という意味を表す場合、英語には *to depend on* 以外に、どのような言い回しが存在するだろうか。この候補として *to count on* をはじめ、*to calculate on, to figure on, to hang on, to reckon on, to rely on, to rest on* が挙げられよう。注目すべきは、どの表現でも前置詞が on ということである：…

…したがって、*dépendre de* を借用した際に、英語は *de* という前置詞に違和感を覚えたため、同義の表現との「類推」によって、それに相当する of を on に徐々に交換していったが、ドイツ語 von では不自然だと感じたものの、そのまま借用翻訳した形を採用して、今日に至ると結論付けられる。

－ 尾崎（2009: 6-10）（下線・一部省略筆者）

あくまでも客観的事実として豊富な言語資料を挙げながら、［depend on NP］における共起関係を翻訳借用の視座から深く観察した尾崎（2009）は、メタ・プロセス

とも言うべき共時・通時の立体的な論旨の組み立てに基づいており、言語学研究の本質に根ざす重厚な論考である。特に、本件の研究主題に関る部分として、下線部の論考箇所が多いに参考になった。下記（13a-c）として当該個所の主旨をまとめる。

（13）a. 中英語期に初出。当時は［depend of NP］の形態であり、「分離」概念表示語 of が用いられていた。

b. ラテン語 pendere の概念表示に相当する英語 hang と on との共起形態は古英語期にはすでに出現しており、「依存する」の意で用いられていた。

c. 当初は［depend of NP］の形態が優勢であったものの、その他の類義表現との関連・類推によって［depend on NP］が用いられるようになった。

ここで注目すべくは、前述（11）でも確認したように、本来、奪格概念表示の前置詞を従えていた事実から、［depend on NP］に至るまでのミッシング・リンクが存在していること、次に、［hang on NP］の形態は、（意図的に宛がわれたかどうかは別にして）「頼る」ではなく、あくまでも「依存する」の意に集約させていること（この件に関しては後述）、である。ただし、前者に関して、（文献学の枠組みでは研究アプローチが異なることから必然ではあるものの）そのミッシング・リンクを「類義表現からの類推に起因する」として埋める主旨には論考の余地が残る。そうした論理が成立するのであれば、その他の多くの種類の表現でも同様の現象が共通して発生する再現性が確認されなければならないと考えられるからである。一例を挙げると、以下（14）－（16）に示されるように、provide, supply が for を伴って与格名詞句を従えるのに対し、類義語 furnish には同様の構造が適用されず、必ずしも類義表現から類推して統一されるわけではない[10]。

（14）a. President Carr: You shall not *provide* counsel beyond your own subject *for* any student at any time.

－ 映画 *Monaliza Smile*（2003）<01:43:53>（イタリック体筆者）

b. Henry: Quabbin Reservoir *supplies* the drinking water *for* all of Boston.

－ 映画 *Dream Catcher*（2003）<01:51:06>（イタリック体筆者）

（15）a. The government { *provided* / *supplied* / *furnished* } the refugee *with* clothes.

b. The government { *provided* / *supplied* / **furnished* } clothes *for* refugee.

（16）*furnish somebody/something with something... to supply or provide somebody/something with something;* to supply something to somebody

－ *OALD*（s.v. furnish, *v.* 2）（イタリック体筆者）

なお、ここでの「再現性」とは普遍性を見つめる科学実証に位置づけられ、単に語彙概念範疇だけに留まるものではない。たとえば拒否動詞一つを採り上げても、通常、reject, decline などが動名詞形を従えるのに対し、refuse だけが to 不定詞形を従えるなど、「分化」が保たれたままとなっている事例も散見される。いや、厳密には「保たれたまま」というだけでは適切ではなく、言語の経済性を考慮すると、「分化」するにも「同化」するにも各々「それ相応の理由」が存在していなければならないはずである。まさに、前出（12）で述べられているような「母語話者の違和感」に応じて「分化／同化」のいずれかが決定されるのだから、あくまでも、「その違和感とは何か」という認知プロセスの正体を突き詰めない限り、事象認識と表現形態の相関関係の解明に踏みことができない。したがって、たとえ最終的には部分的にでも「類義表現からの類推」が関与していたとしても、［depend of NP］から［depend on NP］に至るまでの移行過程には当時の人々の認識に根差す「それ相応の理由」が存在しており、認知言語学的視座からそのミッシング・リンクに着目することが前述（３）－（８）で観察した諸問題解決への契機になると考え、論を進める。

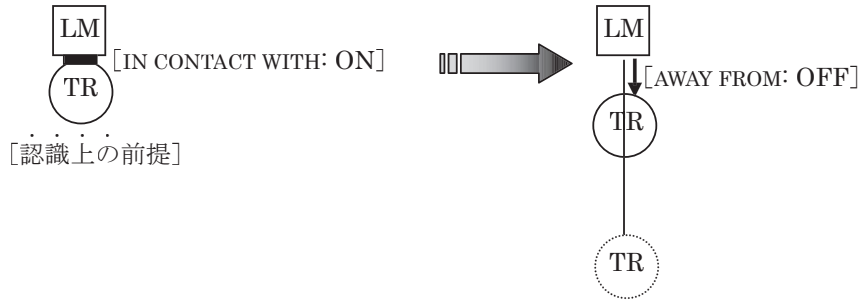
3．［depend on NP］における身体性の認知メカニズム

3．1．［depend of NP］の概念

3．1．1．移動のスキーマに基づく「of vs.from」の概念対立

まず、2．（11）－（12）の歴史的事実が物語るように、depend の原義概念が［+ HANG］に遡及することは疑いようがない。したがって、いわゆる「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる」認識がそこに反映されているのだから、必然的に、その「起点箇所からの分離」事象に言及する奪格概念表示前置詞が共起パートナーとして選択されていたことには合点がいく。このプロファイルされた参与者の相関関係の認識は下図（1）として描かれる。

（1）



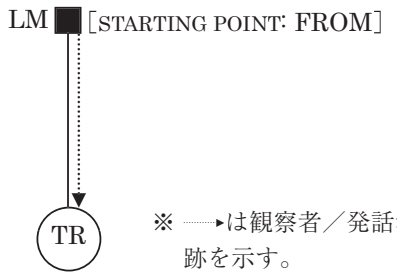
また、共起前置詞は異なるものの、このような奪格概念認識は以下（2）の記載およびそこから得られる概念図（3）にも確認され、［depend on NP］だけを共時的に見つめるだけでは依然としてその概念が明らかにならないことが確認される [11]。

（2）《古》［…から］垂れる、垂れ下がる［from］

・a kite *depending from* a tree

－ *GEJD*（s.v. depend, *vi.* 4）（下線筆者）

（3）



※ ⇢は観察者／発話者の心的走査（MENTAL SCANNING）の移動軌跡を示す。

ここで、認知言語学におけるメタファー理論に基づいても同様の見解が適用される。通常、語句の意味変化は「物理的事象・事物を表示する根源領域（SOURCE DOMANI）から（それよりも）抽象的事象・事物を表示する目標領域（TARGET DOMAIN）への一方向的流れに沿って移り変わる」という特性を持つことから、「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる（［＋HANG］）」認識から如何にして「依存する、頼る」といった意に至ったかについてのトリガー（TRIGGAR）を見つめる必要があることに何ら変わりはない。

まず、こうした［＋DEPEND］概念に言及する［depend of / from NP］の形態について、２．(12）では、古い意味用法（もしくはすでに廃れた意味用法）として取り扱われており、実際そのとおりである。

しかしながら、現代英語において同様の形態がまったく用いられていないかといえば、そうではない。非常に稀有な例ではあるが、その意味転化の実例として次の（４）が挙げられる[12]。

（４）Tsuladze: No, game *depends* not *of* talent, it *depends* exclusively *from* luck. And I feel inside my mind, you'll certainly be lucky for 100 thousands today!

－ 映画 *Na Deribasovskoy khoroshaya pogoda, ili Na Brayton-Bich opyat idut dozhdi*（1992）（イタリック体筆者）

ここで注目すべきは、depend が同じ奪格概念前置詞を従えるといっても、of と from でその概念対比を生んでいる名残が見受けられることである。結果から言えば、この概念対比は下記（５）の捉え方と並行する。

（５）更に、この「経由」概念を活用すれば、‘be made from’ と ‘be made of’、‘die from’ と ‘die of’ といった「熟語」と呼ばれる連語表現について、なぜ前置詞 of, from との共起関係で各々異なる概念が生じるのか、その意味論的メカニズムが明らかになり、語用上の誤解を生じさせない学習・指導を行うことが可能となります。

まず、次例（9）に注目してみましょう：

（9）Bill went *from* San Francisco *to* New York.

（9）はサン・フランシスコからニューヨークに至るビルの物理的直線移動を表しています。しかしながら、[from X to Y] という表現には、以下（10）のように、出発点と到達点の間にその直線を一休みさせるような点、いわば「経由点」のようなものを付加して捉えることができます：

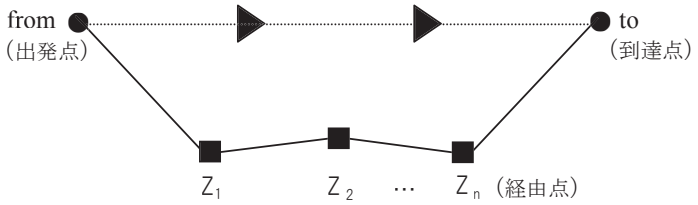
（10）Bill went from San Francisco to New York { *via* / *by way of* } St. Louis.

この経由点は一つに限られることはなく、下記（11）のように複数個存在しても構いません：

（11）Bill went from San Francisco to New York { *via* / *by way of* } St. Louis and Dallas.

このような移動行為の出発点・到達点・経由点は次の（12）のようなイメージ・スキーマ（image-schema）（＝人間が身体的・知覚的に繰り返し経験したことを抽象的レベルで構造化したもの）と呼ばれる概念図で描かれます：

（12）



…したがって、上出（13）（以下（17）として再掲）には、

（17）Wine *is made from* grapes.

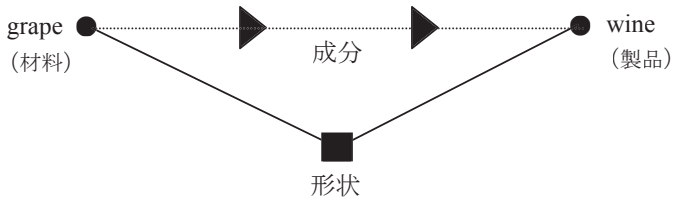
次の概念上の図式が成り立ち、

（18）A be made from B：

「A（製品）≠ B（材料）」→ 製造後に材料が何であるかが一目瞭然でない

材料であるぶどうからワインが作られる時、形状が変化する事象が表されます。具体的に言えば、製品（ワイン）は「成分」と「形状」からなり、変化するのは形状のみで成分には何ら変化はありません。つまり、ぶどうという材料を変化させることによってワインという製品に到達させる行為を物理的移動行為（＝或る物体を移動させることによって別の位置に到達させる行為）に見立てれば、それだけ製品と材料とが概念的に「遠い」わけです：

（19）［A（＝製品）be made from B（＝材料）］の捉え方



したがって、ぶどうがワインに変わる時、成分は直線的に移動しますが、形状は変化という過程を「経由」しての移動、すなわち概念的に「遠さ」につながる寄り道をして移動すると捉えられます。そして、この「遠さ（＝間接性）」が言語化される時に from が用いられることになるのです。

それに対し、‘be made of’の of は通時的（＝歴史的）観点から見れば off と同源です：…off の中核的イメージは「（線／面からの）分離」ですから、［make A of B］は「B から分離させて（of）A を造る（make）」ことを表します。つまり、その受け身形である［A be made of B］の形は「A ＝ B」（＝直接的）という概念上の図式を示しているのです：

（22）A be made of B：「A ＝ B」（＝直接的）という概念上の図式を示す

したがって、次の（23）は、

（23）Those tables *are made of* wood.

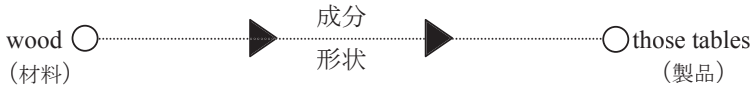
以下の概念上の図式が成り立ち、

（24）A be made of B：

「A（製品）＝ B（材料）」→ 製造後に材料が何であるかが一目瞭然

材料である木から机が作られる時、成分だけでなく形状も変化しない事象が表されます。つまり、それだけ製品と材料とが概念的に「近い」わけです：

(25)［A（＝製品）be made of B（＝材料）］の捉え方



以上の理由から、寄り道（via / by the way of）がない、という「近さ（＝直接性）」が言語化される時に of が用いられると言えます。

－ 上野・森山・福森・李（2006: 866-870）（一部省略・変更筆者）

つまり、［be made of NP］の of は強形としての off に遡及する事実を鑑み、その与格名詞句指示物からの「分離」による［＋DIRECT］の概念が抽出される。この認識が［die of NP］や［depend of NP］にも並行して反映されている。他方、［FROM X TO Y］という移動のスキーマにおいて、出発点（＝材料）と到達点（＝製品）とのあいだに経由点を設けることができる認識を逆手に取った認知プロセスが機能し、そこから生じる［＋INDIRECT］の概念が、ここに挙げた［be made from NP］だけではなく、［die from NP］や［depend from NP］にも反映されている。その結果、上出（4）においては、game の指示物に対する talent, luck それぞれの指示物から見た概念上の「近さ」／「遠さ」、すなわち、「直接性」／「間接性」各々の認識対立が of と from によって具現化されていると考えられるのである。

3．1．2．「従属；依存」の認識

もう一度、3．1．2．（4）（以下（1）として再掲）に注目してみよう。

（1）Tsuladze: No, game *depends* not *of* talent, it *depends* exclusively *from* luck. And I feel inside my mind, you'll certainly be lucky for 100 thousands today!

－ 映画 *Na Deribasovskoy khoroshaya pogoda, ili Na Brayton-Bich opyat idut dozhdi*（1992）（イタリック体筆者）

３．１．１．では、of と from 各々によって表示される概念対立を観察したが、ここでの［X depend of Y］／「X depend from Y」いずれであっても、Y に対する X の意味論的関係づけは、筆者には［＋RELY］ではなく［＋SUBORDINATE］であるように感じてならない。事実、３．１．１．（３）（以下（２）として再掲）で観察したように、

（２）《古》［…から］垂れる、垂れ下がる［from］

・a kite *depending from* a tree

－ *GEJD*（s.v. depend, *vi.* 4）（下線筆者）

奪格概念表示前置詞と共起した depend の原義概念は「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる」に遡及し、上下の空間関係づけにおける「従属；依存」の認識に写像されている。次の（３）もその証左の一つとなろう。

（３）《言語》従属［依存］する

－ *GEJD*（s.v. depend, *vi.* 5）

さらに、前者の［＋RELY］の概念表示に対して、後者の［＋SUBORDINATE］のそれにはいわゆる「次第である」という日本語訳が宛がわれることが多いが、この「次第」という日本語表現自体における「従属；依存」認識も、本来、物理的空間関係づけからの投射（PROJECTION）に起因している[13]。下記（４）がその詳細である。

（４）①上下・前後のならび。順序。源氏物語（鈴虫）「人々の御車―のままにひき直し」。「式―」

②順序。段々。→次第に。

－『広辞苑』（s.v. し・だい【次第】、名詞）（下線筆者）

以上の観察から得られることは、dependそれ自体の意味変化プロセスを論ずることなくして、その共起関係にある前置詞との概念的結びつきを明らかにすることができないのではないか、ということである。事実、dependは以下（5）に記されるように、その意味発生の順序は［＋SUBORDINATE］の概念表示が［＋RELY］のそれよりも早く、その逆ではないこと、さらに、次の（6）に示されるように、dependが［＋RELY］の意味を帯びた時代に前置詞onに統一されていることが、この捉え方の妥当性を物語っている（なお、形容詞形dependentの対義語であるindependentの初出は1611年（cf. *OED*（s.v. independent, *adj.*））。

（5）1《1410》… による、… 次第である.
　　2《c1450》《主に文語》たれ下がる.
　　3《1500-1520》頼る、当てにする.
　　－ *KEED*（s.v. depend）（下線筆者）

（6）To rest entirely *on, upon*（† *of*）for maintenance, support, supply, or what is needed; to have to rely *upon*
　　－ *OED*（s.v. depnend, 4）（下線筆者）

実は、2.（1）（以下（7）として再掲）の主旨に違和感を生じさせた原因がこの捉え方の不在にあり、たとえ一般学習参考書の定義づけであると言っても、「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる」イメージが「頼る」の意に結びつくとするだけでは、一足飛びの解説である感が拭えず、学習者自身の自然な経験の相に沿った理解には至り難いと考えられる。

（7）頼る、〜による
　原 ぶら（pend）下がる（de）
　イメージ （他人の力に）ぶら下がる、おんぶする
　解 pendに＜重さをかける、ぶら下がる＞意味合いがある：pendant ペンダント（⇦首からぶら下がっている）/ pending 未決定の（⇦宙ぶらりんの）/ pendulum 振り子 / appendix 盲腸（⇦ぶら下がるようについている）

－ *DEWI*（s.v. depend）（下線筆者）

つまり、depend は、

（８）［＋HANG］→［＋SUBORDINATE］→［＋RELY］

という順に概念変化を起こした多義性を持つ語であり、［＋SUBORDINATE］概念発生期までは奪格概念前置詞句が優勢を極めつつも、後年の［＋RELY］概念発生期は（現代英語における［＋SUBORDINATE］の概念表示であっても統一して）接触概念前置詞が普及した、という仮説が成り立つ。事実、２．（６）－（７）（以下、それぞれ（９）－（10）として再掲）の容認度、ならびに、下記（11）の論考もこの仮説内で説明され、前者の判定は原義概念との直接的派生関係に当たる［＋SUBORDINATE］の概念表示のケースにのみ［＋HANG］の表現を宛がうことが可能であるのに加え、後者の普遍性は同じく［＋SUBORDINATE］の概念表示のケースにのみ適用され得る。

（９）a. 彼は生活費をいつも母親に ?? ぶら下がっている／ ?? 吊り下がっている／ ?? 掛かっている。

b. George: Hey, at least I was a camp waiter.

Jerry: Camp.

George: It was a fat camp. Those kids *depended on* me.

（減量キャンプだったんだよ。子どもたちは僕に ?? ぶら下がっていたんだ／ ?? 吊り下がっていたんだ／ ?? 掛かっていたんだ）

－ TV ドラマ *Seinfeld*（1989），Episode 3: The Busboy（1991）

（イタリック体・日本語訳筆者）

（10）a. この成果は、君の努力に掛かっている。

b. Remy: Well, it all *depends on* how you look at it.

（すべてはそれに対する君の見方に掛かっているんだ）

－ 映画 *Gone Baby Gone*（2007）<00:23:59>

（イタリック体・日本語訳筆者）

(11) ここで、*to depend* について調査しているうちに、皮肉な結果として *to hang on* がラテン語 *pendere in* の借用翻訳である可能性が浮上してきた。これに関しては今後の課題としたいが、日本語の「私たちの行く末は彼に**掛かっている**」という表現を考慮に入れれば、借用翻訳というよりはむしろ、それぞれの言語で独立して発生した本来の用法と見なした方が自然であろう。

– 尾崎（2009: 8-9）

それでは、「[＋SUBORDINATE] → [＋RELY]」の概念移行期になぜ共起パートナーとしての前置詞の優勢が変化してしまったのかという問題が依然として残るが、この点については次節に論を譲る。

３．２．[depend on NP] の概念

３．２．１．[depend on NP] に至る意味変化プロセス

３．１．２．では、「従属；依存」の認識を中心に、depend が「[＋HANG] → [＋SUBORDINATE] → [＋RELY]」という順で概念変化を起こした多義性を持つ語であり、[＋SUBORDINATE] 概念発生期までは奪格概念前置詞句が優勢を極めつつも、後年の [＋ RELY] 概念発生期は（現代英語における [＋SUBORDINATE] の概念表示であっても統一して）接触概念前置詞が普及した、という仮説を導き出した。

ここで原点に立ち返ろう。英語動詞 depend の原義概念は [＋HANG] に遡及するが、２．（５a-b）（以下、それぞれ（１a-b）として再掲）ならびに以下（１c-f）の容認の揺れを見つめる限り、いわゆる「頼る」の意では、[hang on NP] は [depend on NP] と常に交換可能というわけではない。

（１）a. You can *depend on* him because he is a trusty person. [＋RELY]
b. ??You can *hang on* him because he is a trusty person. [＋RELY]
c. The old person doesn't have any relatives to *depend on*. [＋RELY]
d. ??The old person doesn't have any relatives to *hang on*. [＋RELY]

e. He always *depends on* her every word.　［＋SUBORDINATE］

f. He always *hangs on* her every word.　［＋SUBORDINATE］

さらに、［＋SUBORDINATE］の概念表示にその原義概念である［＋HANG］が直接的に関っているといえども、次の（２a-b）に示されるように、一般的に、奪格概念表示前置詞を共起させた［hang from NP］ではその意は表示し得ない。

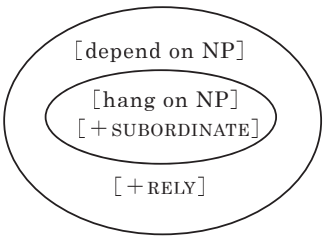
（２）a. Dan: Hey, listen, Dr. Cox, no offense, I'm a big fan of the tough guy act, but let me tell you what I really think. I think you LOVE the fact that these kids idolize you. Johnny does! Johnny was always the one in the family we KNEW was going someplace. Sweet kid. Smart kid. Becoming a doctor? This is ALL he ever wanted, and yet, somehow, you've found a way to beat that out of him, haven't you? Turn him into some kind of cynical guy who seems to despise what he does. Dr. Cox, Johnny is never gonna look up to me. Ever. But he *hangs on your every word*. So I'm askin'—I'm tellin' you: take that responsibility seriously, stop being such a hard-ass. Otherwise, you're gonna have to answer to me.

－ TV ドラマ *Scrubs*（2001），Episode: My Brother, Where Art Thou?（2003）（イタリック体筆者）

b. ??He *hangs from your every word*.

以上の言語事実が物語ることは、まず、下図（３）に描かれるように、

（３）



［depend on NP］の意味論的守備範囲と［hang on NP］のそれは包含関係にあること、次に、

（4）現代英語における動詞 hang は「接触」概念表示前置詞を伴って初めて［＋SUBORDINATE］の意を表すことができるのであって、典型的には、その役割は奪格概念表示前置詞との共起関係では担うことができない、

ということである[14]。

しかしながら、その一方で、［hang on NP］の形態を用いながらも、上記（3）で導き出された相関関係を壊す表現が存在している。その実例として、以下（5）に目を向けてみよう。

（5）Adriana: How distasteful! That a man of your stature would scheme with his servant to upset me like this. It may be my fault that you've been avoiding me, but don't make things worse by treating me with contempt as well. *I'll hang on your sleeve: you're an elm tree, my husband, and I'm a vine.* My weakness is enhanced by your strength, which gives me the strength to say this: the things that take you away from me are worthless — just overgrown weeds in need of a trimming. They get into your system and infect you, feeding off your confusion.

－ *The Commedy of Errors*, Act 2, Scene 2（イタリック体筆者）

まず、斜体部分について、話し手と聞き手の主従の位置づけがそれぞれ、幹と（その木から垂れ下がる）果実の関係で喩えられている。そして、ここで注目すべくは、その主従関係を表すメタファー認識が同時に「身体性」の観点をも根源領域としていることである。つまり、木から垂れ下がる果実が如く、対象者の袖に「縋り付く；依り縋る」かのような「依存性（DEPENDENCE）」が hang on your sleeve で表されている。こうした「身体経験」を通したメタファー表現が、この

種の文脈から独立して、すなわちイディオム表現として成立したことは、次の（6）においても確認される。

（6）＜人＞に頼る、＜人＞の言いなりになる

－ *GEJD*（s.v. hang on O's sleeves）

そもそも、［hang on NP］における主従関係は、重力による上下のぶら下がり認識に基づくものであるが、その主体の様態は何も無生物の引っ掛かりによるものばかりではない。たとえば、下記（7）に示されるように、その主体が人間である場合、通常、「手（hand）」を用いると同時にその対象者／対象物を「離そうとしない（WILL NOT LEAVE OFF）」という認識がプロトタイプとなる。

（7）Amy: If Sheldon ever proposed to me during sex, my ovaries would *hang on to him and never let go.*

－ TV ドラマ *The Big Bang Theory*（2007），Episode: The Date Night Variable（2012）（イタリック体筆者）

また、この「離そうとしない（WILL NOT LEAVE OFF）」というプロトタイプ認識の存在は、以下（8）－（9）に示されるように、POSSESSIONABLE IS IN HAND という方向づけのメタファー（ORIENTATIONAL METAPHOR）を通して、所有志向表現に移り変わることからも確認される。

（8）Bertha: And even if it did, I know I couldn't part with my baby, not just to *hang on to a job.*

－ 映画 *Gosford Park*（2001）<02:00:38>（イタリック体筆者）

（9）Bobby: Felix! Use it or *hang* it up, okay? Sarah had a big heart. It was always fight or flight with her. You guys remember how she was right? This is all based on facts. She was the kind of person you want to *hang... onto* but she would not be held with you.

－ TV ドラマ *Orphan Black*（2013），Episode: Natural Selection（2013）（イタリック体筆者）

そして、その身体性の色合いをより明示化した実例が次の（10）－（11）であり、上出（7）と同様、重力による上下のぶら下がり認識が生きていさえすれば、その主従の物理的位置はそれぞれ「真上－真下」の関係でなくともよいことが見出される。

（10）Anne: But you want someone who'll adore you... someone who'll be happy just to *hang on your arm*, and build a home for you.

－ 映画 *Anne of Greengables, The Sequel*（1988）<00:58:14>（イタリック体筆者）

（11）Catherine: Classic Vegas. He pays for her boobs, tummy tuck, Prada, weekly spa, French manicure. And she's just *hanging on his arm* like she belongs.

－ TV ドラマ *CSI: Crime Scene Investigation*（2000），Episode: Early Rollout（2004）（イタリック体筆者）

ここでようやく［depend on NP］の意味変化のプロセスが明らかとなる。前出（3）では、包含関係に基づく［depend on NP］と［hang on NP］各々の意味範疇の棲み分けを確認した。一方で、“one's sleeves”などの名詞句と共起することでその枠組みを越え、後者が［＋RELY］の概念へと近づく必要条件も観察した。特に、上記（11）では“like she belongs”が後続することによってその「依存性」が増幅されていることからも明らかなように、たとえ主体と対象者／対象物が各々、物理的に「真上－真下」に位置していなくとも、あくまでも「重力による身体経験」を通して、その主従の関係に「垂れ下がり」という上下の力学的空間関係づけが機能しているのであれば、「［＋SUBORDINATE］→［＋RELY］」という変化への必要条件を満たし、さらに、主に対する従のそうした「縋り付く；付着」認識が「接触」概念表示語 on としてその姿を表していると考えられる。繰り返しとな

るが、このような認識メカニズムは我々の身体を通して繰り返し得られた経験のゲシュタルト（EXPERIENTIAL GESHTALT）に基づくのだから、同様の［＋HANG］を原義概念とする［depend on NP］にも必然的に再現され、「身体性に基づく運動スキーマ」がトリガーとなって「［＋SUBORDINATE］→［＋RELY］」という概念変化をもたらしたことが導き出されるのである。

３．２．２．［depend on NP］の概念と姿勢変化の認識

３．２．１．で観察した「重力による身体経験」をさらに論考するとき、ここで最後に残された問題となるのは、「垂れ下がり＋主に対する従の付着」という主従の力学的空間関係づけが「［＋SUBORDINATE］→［＋RELY］」という意味変化をもたらすには如何なる「背景知識の枠組み（FRAME）」が存在しているかについてであろう。これを明らかにする鍵となりそうなのが、我々の日常生活から得られた「姿勢変化」への認識である。

人間は、通常、地面／床の上に「立」って仕事・作業・労働といった日々の活動を行っている。また、人間の基本活動の一つである「移動」を行うためにも「立」姿が必要であることは言を俟たない。逆に、「座」や「横」の姿勢については、やがて活動するためにとらなければならない（立姿勢の前段階としての）「休息」行為を表すことから、そこには「働き動く」事象を想起することが難しい。以下（１）－（２）がその認識を表す実例である。

（１）少し ｛座って／横になって／?? 立ち上がって｝ 一息ついたらどう？

（２）Why don’t you ｛*lie down* / *?? stand up*｝ and relax yourself?

ましてや、人間の「横臥」姿勢に至っては、次の（３）－（５）に示されるように、「死」の概念と結びつくこともあり、「立」姿勢に見られる「活動」概念と対極に位置することが確認される。

（3）His horse *lay* on the road.

– *KDEC*（イタリック体筆者）

（4）彼は銃弾に倒れ、地面に横たわったままピクリともしなかった。

（5）The students $\left\{ \begin{array}{l} rose \\ ??lay \end{array} \right\}$ to go into action against the bill.

人間は何らかの活動をするために毎日を生きているのであって、休息をとるために生きているのではない。故に、「立」姿勢が自然な姿であると捉えられる。

自身の姿勢変化から得られる、このような活動認識は下記（6 a-b）においても確認され、「自身で立ち上がる」ことが「自身で活動する」ことに直結している。

（6）a. Lorraine: So he can *stand up for himself* and protect the woman he loves.

– 映画 *Back to the Future*（1985）<01:12:21>
（イタリック体筆者）

b. Marty: You're somebody who's gonna *stand up for yourself*. Somebody who's gonna protect her.

– 映画 *Back to the Future*（1985）<01:12:51>
（イタリック体筆者）

そして、立姿勢に移行することは、自身の足（foot）を「土台」にした労力を要する行為である。この「立姿勢への移行－土台－労力」の三者の関係が如実に反映された実例が以下（7）であり、その認識を比喩的に拡張させた実例が次の（8）となる。

（7）Brenda: If the audience is not *standing on their feet* at the end of tomorrow night, I will personally kick their asses. Because school let out. It's been 9 hours since I said "I love you" and "bye." I was standing here in the doorway, remember? You were laying in bed, being pathetic.

－ TV ドラマ *90210*（2008），Episode: Wide Awake and Dreaming（2008）（イタリック体筆者）

（8）Save your tears for the day
when our pain is far behind
On your feet, come with me
We are soldiers *stand or die*
Save your fears, take your place
Save them for the judgement day
Fast and free, follow me
Time to make the sacrifice
We *rise or fall*

－ “Rise,” sung by Origa（2004）（イタリック体筆者）

換言すれば、活動し続けるには「立ち続ける」必要があり、座／横臥姿勢に再び移行することは、その活動を休止／停止することに他ならない。この認識が反映された実例が下記（9）である。

（9）When the night has come
And the land is dark
And the moon is the only light we'll see
No, I won't be afraid
Oh, I won't be afraid
Just as long as you stand, stand by me

－ “Stand by Me,” sung by King（1961）（イタリック体筆者）

詰まるところ、以上の論考から得られる活動経験の形態は以下（10）であり、

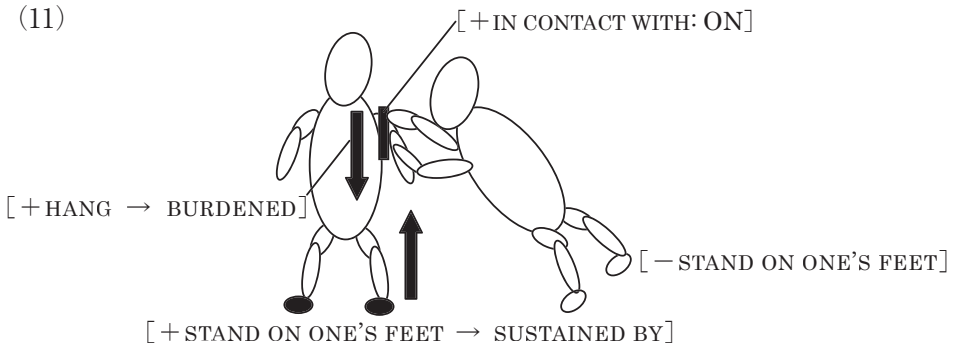
（10）（移動を見据えた）立姿勢への移行：活動の開始
→ 立姿勢の継続：活動の継続

→ 座／横臥姿勢への移行：活動の休止／停止

この理想化認知モデル（IDEALIZED COGNITIVE MODEL; ICM）がフレームとなって、3．2．で観察した［depend on NP］の意味変化プロセスが支えられていると考えられる。なぜなら、原義概念として［＋HANG］を持つ depend が「［＋SUBORDINATE］→［＋RELY］」という概念変化を引き起こした背景には「身体性」を基盤にした「垂れ下がり＋主に対する従の付着＝『縋り付き；依り縋り』認識」という主従の力学的空間関係づけが存在していると想定され、これは裏を返せば、その「依存性」が従の［－STAND ON ONE'S FEET］という姿勢認識を通して拡張した概念化であることが我々の日常の身体経験から導き出すことができるからである[15]。

以上の論考を、下図（11）として簡潔に示す[16]。

（11）



なお、この論考の妥当性は、次の（12a-b）に示される通時的視点からも支持され、on / upon との共起関係が優勢となって［＋SUBORDINATE］から［＋RELY］へと概念表示した背景には、［＋BURDENED］（＝主に重荷となって）や［＋SUSTAINED］（＝主によって下から支えられて）という身体性に関る認識が存在していることが再確認される[17]。

（12）a. With *on, upon*（† *of*, etc.: see 2): To be connected with in a relation of subordination; to belong to as something subordinate; to be a

dependant of *c*1500 Melusine 333 Partenay, Merment, Vouant & al theire appurtenaunces.. with the Castel Eglon with al that therof dependeth.

– *OED*（s.v. depnend, 3）[18]

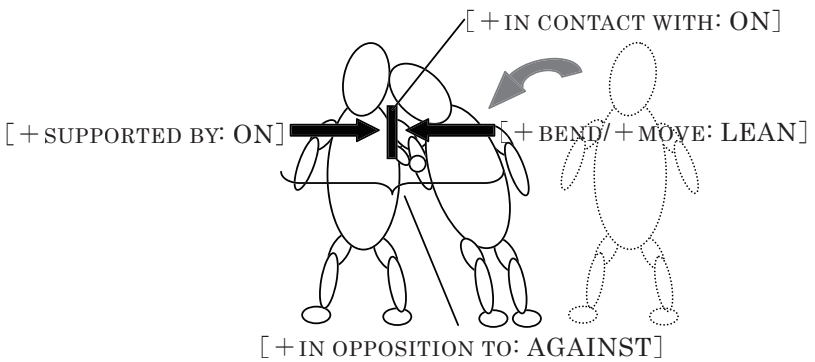
b. To rest entirely *on, upon*（† *of*）for maintenance, support, supply, or what is needed; to have to rely *upon*; to be a burden *upon*, to be sustained by; to be dependent *on*.

1548 HALL *Chron*. 151 b, The whole waight and burden of the realme, rested and depended upon him.

– *OED*（s.v. depnend, 4）（下線筆者）[19]

他方、上図（11）の概念化は、類義表現［lean on NP］のそれと酷似しているように感じられるかもしれない。しかしながら、“to bend or move from a vertical position”（*OALD*（s.v. lean、*v*. 1））と定義されていることからも明らかなように、lean の行為者は垂直姿勢が起点となりながらも、従から主へのプロトタイプ的加圧方向はあくまでも「水平」方向に限られる。だからこそ、同事象は「対抗」概念表示前置詞 against を用いた［lean against NP］でも表し得る[20]。したがって、上図（11）において「垂直；下」方向に加圧方向を持つ［depend on NP］の概念は、必然的に、次図（13）に描かれる［lean on NP］のそれよりも「主に対する従の依存性が強い」ことが意味されることになるのである。

（13）



4．英語における［depend on NP］の概念拡張マップ

以上、本稿第２章ならびに第３章の論考から得られた［depend on NP］の意味変化プロセスを、「現代英語［depend on NP］に至る概念拡張マップ」として以下（1）に簡潔に記す。

（1）現代英語［depend on NP］に至る概念拡張マップ

① 英語動詞 depend の原義概念：［＋DOWNWARD（de-)］・［＋HANG（-pend)］

↓ 奪格概念表示前置詞との共起関係――与格名詞句指示物からの「垂れ下がり」認識

② a. 中英語期の形式：

・現代英語期では古語表現

b.［+ SUBORDINATE］の概念：

・「真上－真下」に関る従属空間関係づけ。

・［depend of NP］／［depend from NP］にはそれぞれ、移動のスキーマに基づく「直接性（OFF)」／「間接性（FROM)」の因果関係が反映。

↓ 接触概念表示前置詞との共起関係―「垂れ下がり」認識に基づく「縋り付き；依り縋り」の身体経験

③ a. 現代英語の形式：

・［depend + on + NP］

b.［＋RELY］の概念：

・「上－下」に関る身体性の加圧・力学的空間関係づけ。

・［depend on NP］には、人間の日常生活から得られる姿勢変化のゲシュタルトを背景に、「縋り付き；依り縋り」の身体経験に基づく「主に対する従の付着（IN CONTACT WITH)」ならびに「従に対する主の支え（STAND ON ONE'S FEET → SUSTAINED BY)」の因果関係が反映。

４．おわりに

本稿では、我が国の英語教育課程で必ず学ぶ［depend on NP］の形態を一例に、その意味との関係を「イメージ」と記して説明しようとする語彙学習指導の在り方を模索した。誤解のないように再度述べるが、「イメージ」を用いること自体の是非を問うているわけではなく、それを発展改良するためのフィルターとして実学たる言語学の学術研究成果が如何にして教育に貢献し得るのかという一つの可能性を提示したに過ぎない。確かに、本稿の論考内容はあくまでも認知科学研究領域に留まるものであり、何の加工もすることなしにその詳細を教育現場で提示できるものではない。また、高等教育内であっても教養としての英語教育の枠組みではそのまま提示できるものでもない。しかしながら、たとえそのような場合であっても、たとえば、３．２．２．（11）－（12）図も用いながら、

（１）「英語動詞 depend は *pend*ant や *pend*ulum と同じく、本来は『垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる』イメージを持っています。そして、［depend on 名詞句］が「頼る」の意を表す理由については自らの身体経験を振り返ってみましょう。つまり、この『下』方向に『垂れる』概念（de- + -pend）と『接触』概念（on）とが複合的に働き、対象者／対象物に手を使って自身の身体の重みをかけ、相手に身を任せるほどの『縋り付く；依り縋る』イメージで捉えれば良いわけです。その意味では、単に『寄り掛かる』イメージの［lean on 名詞句］よりも『依存性が強くなる』のですね」

と説明するだけでも、日本語を母語とする英語学習者自身の「自然な経験の相」に沿った理解を推し進められ得ると考えられる。なお、本稿で［depend on NP］の概念表示に宛がうイメージを一貫して「縋り付く；依り縋る」としたのも同学習者の自然な理解を手繰り寄せることと無関係ではない。なぜなら、次の（２）－（３）に示されるように、そこには［depend on NP］と類似した身体経験が反映されているからである。

（2）a. よりすがる。もたれかかる。

－『新漢語林』（s.v. 依、㊀－❶、㋐）（下線筆者）

b. 形声。人＋衣㊟。甲骨文では、人にまとわりつく衣服のさまにかたどる。

－『新漢語林』（s.v. 依、解字）（下線筆者）

（3）頼りになるものにつかまる。「手すりに――・って階段を上る」

－『明鏡国語辞典』（s.v. すが・る【縋る】、❶）（下線筆者）

最後に、本稿冒頭の問題提起に戻りたい。「学問に終着駅はなし」という文言を挙げるまでもなく、言語概念を究明する道はとてつもなく長く、またその歩みも永続的に止めることはできない。そうした学術活動は、夢幻を彷徨うが如く、まるで果てしなき彼岸を目指して漕ぎ出でる無限の旅路にも喩えられるかもしれない。しかしながら、このような地道な活動はすべて言語学者が負うべき使命にあると考える。本稿でも、［depend on NP］の概念一つを明らかにしようとする試みだけで多角的な考察が必要とされたきた。繰り返しとなるが、重層のメタファーで言えば、こうした不可視の激しい底流の活動は言語学者が担いつつ、そこから得られた上澄み部分の美しき流れを還元することこそが、我が国における外国語教育のさらなる発展に貢献する術の一つになり得ると信じて止まない。自戒の念を込めて言っている。

［謝辞］末筆となりましたが、福森 雅史博士（認知言語学、スペイン語学・ポルトガル語学）、福井工業大学 小山 政史先生（英語教育学・言語文化学）、京都産業大学 阿武尚人先生（英語学・言語文化学）には拙稿の隅々までお目通し頂き、貴重なご助言ばかり頂きました。また、日羅教育科学協会 Oana MORIYAMA 氏（教育学・言語心理学）には他言語における同概念表示との異同を共に検討して頂きました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

注釈

1 ここでいう自然言語研究における実学には、人工知能開発などに関る応用研究だけでなく、「言語学の研究成果を活用して隣接科学領域における様々なテキスト総体の解釈を行い、そこに反映された人間の認識を明らかにする」という言語態研究の枠組みも部分

的に関係する。詳しくは、福森・森山（2015）・Moriyama（2016）参照。

2 言語学上の「意味」および「イメージ」に関する厳密な定義について詳しくは、池上（1975: 38-70）参照（ただし、池上（1975）では、「イメジ」（image）と表記）。

3 さらに詳しくは上野・森山（2007）参照。

4［depend on NP］の指示事象は［depend upon NP］でも表現されることから、学習参考書によっては「ぶら下がる」イメージに加えて、そのぶら下がり起点がLMの「（重力方向に基づく）上面」から接触している点に強調が置かれているものも散見される。しかしながら、基幹 -pend が［＋HANG］の概念を表示し、「ぶら下がる」事象はそもそも「（TRから見て）上から」行われるものなのだから、それだけではuponとの共起関係を説明し得ないばかりか、本論で後述する［hang of / from NP］との概念的整合性をもとり得ない。しかも、その捉え方だけでは、同じく本論で後述する［lean on NP］が［lean upon NP］にパラフレーズ可能な事象認識における方向性とも矛盾を引き起こしてしまう。そうした誤解を生じさせる主たる原因として、この見解には「視点の移動」が欠如していることが挙げられる。確かに、英語前置詞uponはupとonとの複合体による（cf. *OED*（s.v. upon））ものだが、たとえば、“There is a fly ***upon*** the floor / ***upon*** the wall / ***upon*** the ceiling.”と表現可能なことからも明らかなように、この「上」とは必ずしも客観的方向性に基づく空間関係づけとは限らない。つまり、ここでは、「壁」／「天井」の面をあたかも地面や床のように見立て、あくまでも「視点の移動」という認知パタンを交えることによって初めて、TRが各々のLMの「上面」に接触しているという認識的方向性が成立しているのである。以上の論拠から、本稿では、uponに置き換え可能という理由だけで「ぶら下がり起点が（重力方向に基づいて）LMの上面から接触している」という見解も採用しない。なお、英語前置詞onとuponとの概念的相違について詳しくは森山智浩・髙橋・森山オアナ他（2010: 133-135）参照。

5 時に「認知言語学研究に歴史的観点は必要としない」とする声を耳にする。しかしながら、言葉は人間の社会文化・文明の発展・変化と共に発達してきたことから、そこに光を当てることは「如何にして外界と関り合ってきたか」という人間の思考の進化・変化の過程を明らかにすることに他ならない。したがって、現象学（および情報学）の論拠も踏まえながら、認知言語学の本質があくまでも以下［1］であるとするならば、極めて物理的な事象から抽出されるプリミティブな認識を多様なものに適用してきた思考様

式の進化・変化の過程の一端を明らかにする上で「歴史的観点」は欠かすことができないと考えられる。詳しくは森山（2008）参照。

［1］メタファー論とカテゴリー論の二つを主幹とし、身体活動、知覚器官、さらには社会・文化環境との相互作用を通して得られた「人間の本性の産物（products of human nature）」（cf. Lakoff and Johnson（1980: 118））を脳内活動の結果事象である言語表現から見つめる認知科学領域研究

6 本論2.（1）で見た「ぶら下がる」イメージの多様性を包括させるため、ここからは適宜、「垂れ下がる；吊り下がる；ぶら下がる」という表現を用いることにする。

7 < >内の数字はそれぞれ、その台詞が当該映画DVD内で生起する<時間・分・秒>を表す。なお、TVドラマの場合は生起タイムを記載しない。以下同様。

8 推測の域を出ないが、本論2.（1）の記載でも「（他人の力に）ぶら下がる」とするだけでは違和感を覚えたからこそ、その直後に「おんぶする」という補足説明を付け加えたのではないかと考えられる。しかしながら、「おんぶする」事象は通常、英語では“carry someone on one's back”や“hold someone on one's back、”“piggyback”といった表現が用いられ、その事象表示に［+HANG］概念が宛がわれること自体がすでにプロトタイプではない。確かに、日本語では「いつもスポンサーにおんぶにだっこだ」といった表現は存在する。しかし、その場合であっても「?? いつもスポンサーにおんぶだ」は自然な表現とは容認されない。つまり、「おんぶする」とする補足説明では［+HANG］の側面を前景化した学習内容にはなり難い。また、「おんぶ」という表現自体、ポルトガル語ombro（肩）に由来するという説もあるが、その場合であっても「背負う」という認識であって「垂れ下がる」のそれが焦点化されているわけではない。そもそも、筆者の知る限り、幼児をおんぶする社会的慣習は本来モンゴル系文化に起源を発し、西欧のそれに由来するものではない。したがって、これも憶測に過ぎないものの、本論2.（8）図のような捉え方では釈然とせず、その一方で「真上－真下」という垂れ下がりの空間関係づけでは現実世界における二者の肉体的位置関係が説明できないことから、「おんぶ」でもってその意味論的ギャップをを埋めようとしたのではないかと推測される。なお、森山智浩・中桐・福森・小山・森山オアナ（2012）内では筆者も［+HANG］の観点だけで同表現の概念説明を展開しており、自省の意味も込めて本稿作成の着手に至っている。

9 他方、方向性は踏まえずに単に［＋SUPPORTED BY］の概念だけで範疇分けを行っている、ということであれば、これは何もここで挙げられた表現に限ることではない。たとえば、以下［1］であれば、his elbow の指示物はテーブルの上面（ABOVE）に接触し（IN CONTACT WITH）、同時にその重みがテーブルによって支えられている（SUPPORTED BY）。

［1］Nathan: By the way his elbow is *on* the table.

－ 映画 *Human Nature*（2001）<00:23:18>（イタリック体筆者）

まさに、本論２．（10）で提唱されているゲシュタルト構造が反映されており、特に on を用いたイディオマティックな表現を挙げずとも、重力もしくは加圧認識を前提とした「接触」事象の多くには通常、［＋SUPPORTED BY］の概念が生きている。なお、“The village is located *on* the lake.”といった事例を挙げるまでもなく、本論２．（10）における複合概念の中でも、［IN CONTACT WITH］がその最たる中核を担う。

10 筆者の知る限り、［furnish X for Y］の構造が用いられている映画実例は以下［1］のみであるが、逆に言えば、その実例の少なさがこの構造を非標準とする事実を物語っている。

［1］Cleon: I don't think you should look down on me, my friend. Aren't we in the same business? We both *furnish* amusement *for* the people.

－ 映画 *The Last Days of Pompeii*（1935）<00:15:52>（イタリック体筆者）

なお、本論では「与格名詞句」という表現を用いたが、厳密には“preposition-dative noun phrase”に相当する。紙面の都合上、同様の名詞句はすべて「与格名詞句」として表記する。以下同様。

11 本論３．１．１．（３）図における TR の存在位置は同時に「到達点における位置（GOAL POINT: TO）」として概念化される。

12 元々ロシアの作品であり、英語に翻訳されていることも考慮しなければならないが、この作品がアメリカでも上映されていること、ならびに、当該作品内容が実際にその英語内容で理解されていることを鑑みて妥当な実例であると判断した。

13 ただし、depend とは異なり、上下の方向づけのみに遡及するわけではないが、優位性を生じさせる「空間関係づけ」でもって「順序」認識が形成されていることに何ら変わりはない。

14 本論2.（11）では“To hang *upon* or *from*, as a result or consequence is contingently attached to its condition or cause”（*OED*（s.v. depend, *intr.* 2））と記載され、その初出例として“1413 LYDG, *Pilgr. Sowle* v. xiv.（1483）108 The werk that he werketh dependeth of fortune and not of hym.”が挙げられているものの、本論3.2.1.（2）に示されるように、筆者の知る限り、（特に現代英語においては）同様の［+SUBORDINATE］の表示を［hang on NP］が担えても［hang from NP］はその限りでない。その主たる理由として、本論第4章でまとめる「（「真上－真下」に関る）従属空間関係づけ」の接触認識、言葉を換えれば、「因果の結びつきの強さ」が「起点」概念表示のfromでは出せない（もしくは弱い）ことが考えられる。同様のことは、本論2.（11）で見た［depend of NP］にも当てはまり、そこで“*on, upon*（formerly, *of*, rarely *from, to, in*）（*OED*（s.v. depend, *intr.* 2））”と記載されているように、本来は「直接性」を表示するofを従えた一方、「間接性」を表示するfromがその優位性に及ばなかった主たる原因であると想定される。

15 繰り返しとなるが、本論3.2.2.（11）図に描かれた「身体性」の観点を導入し得るという点で、［+SUBORDINATE］概念表示の［hang on NP］と異なり、［depend on NP］は［+RELY］の概念表示にも至ったと考えられる。なお、このような身体経験を基盤にすると、前者のonは「上方からの接触（IN CONTACT WITH）」表示であるのに対し、後者のそれは「側面からの接触（IN CONTACT WITH）」表示がプロトタイプであると考えられる。つまり、その被依存認識はあくまでも、本論で論考したフレームによるLMの［+STAND ON ONE'S FEET］概念から生じ、［depend on NP］のonそのものによって表されているのではない。なぜなら、それでは［depend on NP］と［hang on NP］は同義となってしまい、言語の経済性に反すること、さらには、異言語間の対照を通しても、本論4.（2）－（3）で後述する認識と並行することが挙げられる。依存者による加圧方向に対し、あくまでも被依存の「姿勢」認識を通して［+SUPPORTED BY］概念が生じているのであり、依存者から被依存者への身寄せがその事象発生の起点にはなっているにしても、身体接触方向自体が必ずしも常に（物理的）上方からである必然性がないことは我々の運動経験から明らかである。特に、この身体性にdependが内包する［+HANG］概念を加味すると、その身寄せ・接触事象には通常「手」が用いられ、そこに［+HANG ON TO］概念が付加的に生じていることも、この捉え方を支え

る論拠となる。なお、以上の論考を踏まえることで、本論２．（４）で触れた suspend がなぜ［＋ depend］概念表示に至らなかったかにも妥当な説明を与えることができる。その主たる理由として、以下［１］－［２］が挙げられる。

［１］“to attach something to a high place so that it hangs down”（*LDCE*（s.v. suspend, v. 3））と定義づけがなされていることからも明らかなように、言語認識の世界では［＋HANG UP FROM THE GROUND; － SETTLE DOWN TO THE GROUND］という空間関係づけを通し、主従の力学的従属関係ではなく、あくまでも「空中⇔地面」の対比による位置関係の側面が前景化していること、

［２］さらには、認識上の空間関係づけとして「真上－真下」が優先され、［depend on NP］のように身体性に基づく加圧・力学的関係に移行する余地がないこと。

16 言うまでもなく、［＋RELY］概念表示で［depend on］が無生物名詞句を従える場合であっても、それは本論３．２．２．（11）図を基盤にしたメタファー表現にしか過ぎない。

17 したがって、「下」方向を示す接頭辞 de- の存在意義は、本論３．２．１．（11）図に描かれた［＋STAND ON ONE'S FEET → SUPPORTED BY］概念を誘発するための指標辞としてその位置づけがなされる点にある。

18 本論３．２．２．（12a）における“see 2”とは、本論３．１．２．（６）の記載を指す。

19 本論３．２．２．（12b）において無生物を TR にした“The whole waight and burden of the realme, rested and depended upon him.”が表す事象は３．１．１．（１）図の認識に起源を発するメタファー表現であるが、“the whole waight and burden”と記されていることからも明らかなように、LM が土台と認識されている点ですでに［［＋HANG］＋奪格概念］の指示範囲を越えている。したがって、本論２．（12）で見られた「同義の表現との「類推」によって、それに相当する of を on に徐々に交換していった」とする捉え方だけではその意味変化のプロセスを説明するに至る十分条件を満たし難いことが再確認される。他方、この土台認識に基づくと、本論で議論した「真上－真下」の空間関係づけの問題が再浮上するように感じられるかもしれない。しかしながら、前述したように、上例は３．１．１．（１）図の認識から移り変わる過渡期の初出例であること、ならびに、この土台認識だけは［＋HANG］の概念、すなわち「何を起点にしてぶら下がっているのか」という認識が表示し得ないことを鑑みる必要があり、このままでは、「TR が何かにぶら下がっているのであれば LM の土台は必要なくなるのではないか」と

いう矛盾さえも生じてしまう。

20 したがって、本論３．２．２．（13）図に描かれるように、ここでの主従の力学関係は、従を支える主の「水平方向」による加圧認識が前景化している。それに対し、本論３．２．２．（11）図における主従の力学関係は、あくまでも、従を支える主の「垂直方向」によるそれが前景化している。なお、英語前置詞 against の「対抗」概念について詳しくは森山智浩・髙橋・森山オアナ他（2010: 192-209）参照。

21 参考文献について、TV Dramas および Film DVDs について、邦題が存在する場合にのみそれらを記すこととする。

参考文献 [21]

【学術図書・学術論文】

Anno, N.（2014）“A Cognitive Linguistic Approach to ESP Education: in the Case of English Business Terms,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea*, Vol. 6, 115-122. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Bolinger, D.（1977）*Meaning and Form*. New York: Longman.

Chomsky, N.（1965）*Aspects of the Theory of Syntax*. Special Technical Report, Massachusetts Institute of Technology. Research Laboratory of Electronics, No. 11. Cambridge: M.I.T. Press.

Cook, W.A.（1969）*Introduction to Tagmemic Analysis*.（Transatlantic series in linguistics）New York: Holt, Rinehart and Winston.

Curme,G. O.（1963）*Syntax*. Tokyo: Maruzen.

Fillmore, C. J.（1968）“The Case for Case.” in Bach, E. and Ro.T. Harms,（eds.）*Universals in Linguistic Theory*. 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Grice, H.（1989）*Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press.

Gruber, J. S.（1976）*Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North Holl.

Halliday, M. A. K.（1977）*The Linguistic Sciences and Language Teaching*.（Longman Linguistic Library）. New York: Longman.

Hjelmslev, L.（1969）*Prolegomena to a Theory of Language*. Madison: University of

Wisconsin Press.

Jespersen, O. (1984) *Analytic Syntax*. Chicago: University of Chicago Press.

Koyama, M. (2012) "An Applied Study to English Education through the Interpretation of Wh-Movement," in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea*, Vol. 4. 21-31. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Kruisinga, E. (1931) *A Handbook of Present-Day English*, Vol. 4. P. Groningen: Noordhoff.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

Lamb, S.M. (1966) *Outline of Stratificational Grammar*. Washington D.C: Georgetown University Press

Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. New York: Mouton de Gruyter.

Levi, J. (1986) "Applications of Linguistics to the Language of Legal Interactions." in Peter, C. and V. Raskin. (eds.) *The Real-World Linguist: Linguistic Applications in the 1980s*, pp. 230-265. Norwood: Albex.

Moriyama, O. (2006) *Influența Mass-mediei asupra Comportamentului Adoleşcentului*. Braşov: Universitatea Transilvania: Faculatatea de Psihologie şi Ştiințe ale Educației.

Moriyama, O. (2015) "A Pedagogic Approach to Japanese Culture: through the Animated Film *Spirited Away*," in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul*, vol. 1, 104-108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2011) "A Cognitive Teaching Way for Japanese Students: through the Concepts of English Prepositions," in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea*, Vol. 2, 17-24. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2011) "A Cognitive Study of English Education through Cultural Frame: from a Comparative Perspective with Japanese Identity," in Constantinescu, M. et. al.,

Omul şi Societatea, Vol. 3, 98-108. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2012) "Language-Culture Education for Developing the International Bridge between Romania and Japan: from a Didactic Perspective upon Cognitive Linguistics," in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea*, Vol. 4, 21-31. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2013) "Nation and Language," in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea*, Vol. 5, 45-55. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2014) "A Pedagogic Approach to the Innovation of Global Studies' System at the International Course and the English Seminar of Kinki University: along with the UNESCO's Recommendation concerning International Education," in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea*, Vol. 6, 8-18. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2015) "A Cognitive Approach to Japanese Popular Culture: through the Love Songs of Koji TAMAKI," in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul*, Vol. 1, 82-87. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T. (2016) "A Basic Study of Cognitive Script concerning Artifical Intelligence: through the Concepts of Information-Technology Expressions," in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul*, Vol. 2, 29-34. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T., M. Koyama, O. Moriyama et al. (2012) *Soarele* (『太陽』), Vol. 2. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T., O. Moriyama et al. (2012) *Soarele* (『太陽』), Vol. 1. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Okuno, T. (2014) "A Cognitive-Linguistic Analysis of the English Preposition ON," in the *Bulletin of the Faculty of Education*, 112, 71-79. Hirosaki University.

Poutsma, H. (1928) *A Grammar of Late Modern English*, Part I. 2nd ed. Groningen: P.

Noordhoff.

Shakespeare, W.（2005）*The Commedy of Errors*. Digireads.com: Boston.

Talmy, L.（2000）*Toward a Cognitive Semantics: Concept Structuring System (Language, Speech and Communication)*. Cambridge: MIT Press.

Ungerer, F. and H. J. Schmid（1996）*An Introduction to Cognitive Linguistics*. New York: Longman.

池上嘉彦（1975）『意味論 －意味構造の分析と記述－』．大修館書店：東京.

上野義和・森山智浩（2003）『イメージ＆カテゴリーの英単語』．かんぽう：東京.

上野義和・森山智浩（2007）「イメージとカテゴリーによる語彙指導方法の構造改革（その6）― 中学校・高等学校における和訳偏重主義への新提案：多義性のメカニズムと認知言語学導入の研究意義 ― 」『研究論叢』68 号，pp.1-26，京都外国語大学国際言語平和研究所.

上野義和・森山智浩（2012）「異言語教育と言語文化（その４）－メタファー研究の再考と言語文化教育の展開－」『京都外国語大学研究論叢』第 79 号，pp.1-21．京都外国語大学国際言語平和研究所.

上野義和・森山智浩 他（2002）『認知意味論の諸相 －身体性と空間の認識－』．松柏社：東京.

上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉（2006）『英語教師のための効果的語彙指導法 －認知言語学的アプローチ－』．英宝社：東京.

尾崎久男（2009）「英語における借用語の通時的考察 － dependre de は depend of か depend on か？」*Sprachwissenschaft Kyoto* 第 8 巻，pp.1-16．京都ドイツ語学研究会.

東北大学高等教育開発センター（編）（2008）『研究・教育のシナジーと FD の将来』．東北大学出版会.

福森雅史・森山智浩（2015）「漫才と人間の認識 －「大木こだまひびき」における職人話芸への認知言語学的アプローチ－」『文学・芸術・文化』第 26 巻第 1 号，pp.73-117．近畿大学文芸学部.

森山智浩（2008）「英語動詞 *take* に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育 －認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して－」『近畿大学英語研究会紀要』第 2 号，pp. 79-98．近畿大学英語研究会.

森山智浩（2015）「［Enter into NP］の概念研究 －認知言語学的アプローチ－」『近畿大学法学』第 62 巻第 3・4 号，pp. 187-245. 近畿大学法学会.

森山智浩・髙橋紀穂（2010）「レイコフとバタイユの視座における「自殺と反道徳性」の研究 －法言語学と法社会学による学際的アプローチ－」『近畿大学 法学』第 58 巻第 2・3 号（通巻 159 号）（近畿大学法学部創立 60 周年記念号），pp.585-678. 近畿大学法学会.

森山智浩・髙橋紀穂・森山オアナ 他（2010）『英語前置詞の概念 －認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から－』（FD 語学教育改革シリーズ 1）. ブイツーソリューション：愛知.

森山智浩・中桐謙一郎・福森雅史・小山政史・森山オアナ（2012）『Let's Vocabucize 1000 ！ －イメージと映画で学ぶ英単語総合演習帳－』. 松柏社：東京.

【Dictionaries】

［*DEWI*］政村秀實（2002）『英語語義イメージ辞典』. 大修館書店. 東京.

［*GEJD*］小西友七・南出康世（編）（2002）『ジーニアス英和大辞典』. 大修館書店：東京.

［*KDEC*］市川繁治郎 他（編）『新編 英和活用大事典』. Tokyo: Kenkyusha.

［*KDEE*］寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』. 研究社：東京.

［*LDCE*］Quirk, R.（ed.）（1987）*Longman Dictionary of Contemporary English*. London: Longman.

［*OALD*］Hornby, A. S.（ed.）（1995）*Oxford Advanced Learner's Dictionary*. London: Oxford University Press.

［*OED*］Burchfield, R.W.（ed.）（1978）*The Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.

鎌田正・米山寅太郎（2011）『新漢語林』. 大修館書店：東京.

北原保雄（編）（2003-2004）『明鏡国語辞典』. 大修館書店：東京.

新村出（編）（1998）『広辞苑』. 岩波書店：東京.

【TV Dramas】

Big Bang Theory, The（2007）（邦題：『ビッグバン★セオリー　ギークなボクらの恋愛法則』）, Episode: The Date Night Variable（2012）.

CSI: Crime Scene Investigation（2000）（邦題：『CSI：科学捜査班』）, Episode: Early Rollout（2004）.

90210（2008）（邦題：『新ビバリーヒルズ青春白書』）, Episode: Wide Awake and Dreaming（2008）.

Orphan Black（2013）（邦題：『オーファン・ブラック　暴走遺伝子』）, Episode: Natural Selection（2013）.

Scrubs（2001）（邦題：『scrubs　～恋のお騒がせ病棟』）, Episode: My Brother, Where Art Thou?（2003）.

Seinfeld（1989）（邦題：『となりのサインフェルド』）, Episode 3: The Busboy（1991）.

【Film DVDs】

Anne of Greengables, The Sequel（1988）（邦題：『赤毛のアン／アンの青春　完全版』）. Sullivan Films.

Back to the Future（1985）（邦題：『バック・トゥ・ザ・フューチャー』）. Universal Pictures.

Dream Catcher（2003）（邦題：『ドリームキャッチャー』）. Warner Brothers.

Gone Baby Gone（2007）（邦題：『ゴーン・ベイビー・ゴーン』）. LivePlanet.

Gosford Park（2001）（邦題：『ゴスフォード・パーク』）. USA Films.

Human Nature（2001）（邦題：『ヒューマンネイチュア』）. Fine Line Features.

Last Days of Pompeii, The（1935）（邦題：『ポンペイ最後の日』）. RKO Radio Pictures.

Monaliza Smail（2003）（邦題：『モナリザ・スマイル』）. Revolution Studios.

Na Deribasovskoy khoroshaya pogoda, ili Na Brayton-Bich opyat idut dozhdi（1992）. MMO Ingeokom.

【Songs】

King, B.E. (1961) "Stand by Me," in the album of *The Soundtrack to Your Life: 1961 Hits* (2017). Atco Records.

Origa (2004) "Rise." Victor Entertainment.